

〔論 文〕

若きゲ-テにおけるフリーデリケ体験の意義について

溝 井 高 志

目 次

- 一 はじめに——「野ばら」の詩
- 二 ライプツィヒ時代との決別
- 三 ゲ-テ的なものの覚醒
- 四 罪なき罪
- 五 結び——ゲ-テの Enthusiasmus

一 はじめに——野ばらの詩

Sah ein Knab' ein Röslein stehn,
Röslein auf der Heiden,
War so jung und morgenschön,
Lief er schnell, es nah zu sehn,
Sah's mit vielen Freuden.
Röslein, Röslein, Röslein rot,
Röslein auf der Heiden.

Knabe sprach: Ich breche dich,
Röslein auf der Heiden!
Röslein sprach: Ich steche dich,
Daß du ewig denkst an mich,
Und ich will's nicht leiden.
Röslein, Röslein, Röslein rot,
Röslein auf der Heiden.

Und der wilde Knabe brach
's Röslein auf der Heiden;
Röslein wehrte sich und stach,
Half ihr doch kein Weh und Ach,
Mußt' es eben leiden.
Röslein, Röslein, Röslein rot.
Röslein auf der Heiden.¹⁾

わらべは見たよ 可憐なばらを
荒れ野のばらを
若く清やかな美しさ
まじかく見んとかけよって
わらべは見たよ 喜びあふれ
ばら ばら 紅ばら
荒れ野のばらよ

わらべは言った おまえを折るよ
荒れ野のばらよ
野ばらは言った
いやです あなたを刺します
あなたが私を忘れぬように
ばら ばら 紅ばら
荒れ野のばらよ

だけどわらべは折りました
野に咲くばらを
ばらはふせいで刺したけれど
嘆き 叫びのかいもなく
ばらは折られる運命でした
ばら ばら 紅ばら
荒れ野のばらよ

この「野ばら (Heidenröslein)」の詩はシュトラースブルク 遊学 時代のゲ-テがヘルダー (Johann Gottfried Herder) のすすめもあって、エルザス (Elsaß) 地方に残る民謡の蒐集をしていた折りにみつけた一編の民謡が下敷きとなってできた詩で、このわらべ (der Knabe) がゲ-テ、野ばらがフリーデリケ・ブリオン (Friederike Brion) であることはまちがいが

ない。エルザス地方の片田舎、ゼーゼンハイム (Sesenheim) にみつけた可憐・素朴な野ばらと思しき少女フリーデリケ・ブリオンとの喜びにあふれた出会い、そして何ヶ月かの愛の交換の日々——、それにも拘らず、やがてその恋人の許を立ち去らざるをえなかったゲ-テの苦渋、割り切れぬ思い、哀切の思い、彼女への負い目 (Schuld)、そういったものがない交ぜにされつつ、さりげなく、哀惜の思い豊かに表現されている。その素朴な詩の調べがかえって哀切の思いへと人をさそう。

しかし、現実のゲ-テはフリーデリケ・ブリオンとの出会いと別れを仰々しくは語らない。悲しいが、しかしかけがえのない美しい思い出として心の奥底にとどめようとするかのよう。彼女との出会いと別れを叙述した『詩と真実 (Dichtung und Wahrheit)』においてもその口調は意識的に抑制されたものとなっており、その思い出をいとおしみつつ、なお口にすることを思いはばかるかのように、その語り口はためらいがちに、その別れの記述すらも極めて淡々とさりげないものとなっている。『詩と真実』においては、

このような衝動と混乱の中にあっても、しかし私はもう一度フリーデリケと会わずにはいられなかった。それは辛い日々であった。その思い出は私にはもう残ってはいない。私が彼女に馬から手をさしのべた時、彼女の眼には涙が浮かんでいた。私は胸ふさがれる思いがした²⁾。

という別れの記述にとどまっている。

しかし心の傷跡は意外に深く、一人の少女の犠牲を通してゲ-テの心の中には終生はなれることのないわだかまりが、割り切れぬ、釈然とせぬ思いが残る。心をこめて愛情をかたむけあったその恋人の許を、その幸福な何ヶ月かの日々の後に後髪ひかれる思いで立ち去らざるをえなかったその不合理が癒やし難い一つのわだかまりとしてゲ-テの心の中に痕跡をとどめる。

しかし事あるごとにゲ-テはこのフリーデリケ・ブリオンとの幸せな愛の日々の思い出へと帰っていく。E. シュタイガー (Emil Staiger) がいみじくも表現しているように、それは「それ以後、運命の浮き沈みや一切の苦悩と辛苦の彼方において、ゲ-テの人生を揺らぐことなく支えることになるあの幸福な愛」³⁾ の日々であった。この牧歌的な、畢竟するに極めて幸せであったフリーデリケとの愛の体験が、しかし幸福な体験として以上にゲ-テのその後の人生に決定的な意義をもつことになる。

木村謹治氏はその著『若き「ゲ-テ」研究』の中で、ライプツィヒ時代から、第二次フランクフルト時代、シュトラースブルク時代、第3次フランクフルト時代にいたる若い時代のゲ-テについて、こう総括しておられる。即ち、「此の期間は、彼の長い生涯においては、その一小部分を占むるに過ぎないけれども、しかもゲ-テの全存在に対しては、極めて重大な意義をもつものである。即ち彼の天才が初めて大地にその萌芽を出して、大気の中に生命の呼吸を営み始めた天才覚醒の初発的階梯である。彼の有機制は、与えられた一切に反応して、如何に新鮮に潑刺として動き始め、如何に目覚しき成長の光景が展開せられたかは、他の如何なる時代にも見られないものである。従って彼の天才性がその最も鮮明なる形相において提示せられる時代である。故に若し彼の天才性を此の時代において究明し、彼の生活体験、彼の創作活動を観察することによって、彼の生命の独自性を把握することができるならば、それは『全ゲ-テ』の『根本現象』を直観し得たというも必ずしも誇称でないと思う」⁴⁾ と。このことはとりわけフリーデリケ体験 (das Friederike-erlebnis) についてあてはまる。ゲ-テの根本現象 (Urphänomen-Goethe) がここに始まる。ゲ-テの文学が決定的な萌芽を見せ始める。それまでのゲ-テの自らのうちに培ってきた知的教養、精神の粉飾をかなぐり捨てて、これ以後、赤裸々なゲ-テが、自らの生命の律動を直載に表現するゲ-テが立ちあらわれる。ゲ-テ自身

にゲ-テ的な魂の鉦脈の発見を促した女性、それがこのゼーゼンハイムの恋人、フリーデリケ・ブリオンであった。一人の少女の犠牲を通して、ゲ-テ的なものが発火し、覚醒したという意味において、或いはそれを通してゲ-テ的なものの一切がそこから生じてくる創造の源泉が形成されたという意味において、フリーデリケ体験はゲ-テにおいて決定的な意義をもつにいたる。そしてこのゼーゼンハイムでの何ヶ月かは、ゲ-テにとって最も輝きにみちた、憂えることを知らぬ、青春の力の予感にあふれた日々の記念碑としてゲ-テの一生に忘れ難い印象をとどめる。

二 ライプツィヒ時代との決別

フリーデリケ体験の意義を語るためには、それ以前の未だゲ-テが自らの固有の内的世界を発見していない、自らの魂の鉦脈を発見していない、克服されるべき非ゲ-テ的な時代、ゲ-テのかなり長い青春の困迷の時代について語らなければならない。それは当初は希望にみちてはいたが、やがては幻滅と失意に終らざるをえなかったゲ-テにとって初めての異郷での学生生活の時代、いわゆるライプツィヒ時代に他ならない。

ライプツィヒ時代、それはひと言でいうならば、ゲ-テにとって批判 (Kritik) の時代であり、解体の時代である。フランス風の啓蒙主義 (Aufklärung) の支配的なライプツィヒ大学での遊学時代に、ゲ-テがそれまでに自らに培ってきた思考法 (Denkweise)、想像力 (Einbildungskraft)、感情 (Gefühl)、更には郷土的な性格 (veterländischer Charakter) すらもが、フランス風の啓蒙思想の根幹をなす批判の精神によって解体を余儀無くされる⁶⁾。彼の生まれ育った上部ドイツの方言すらが、フランス風に洗練された都会、当時「小パリ (Klein-Paris)」とよばれたライプツィヒの住人達にその粗野がなじられ、非難される。しかし方言こそが魂のいぶきであるにも拘らず、それがなじられ、否

定されることによって、彼は自らの表現手段としての手足をもがれる。ゲ-テはこの当時からふりかえて『詩と真実』の中でこのように記している、即ち、「私が青春固有の熱心さをもってかちえたこれら一切のものを私は失うはめになった。私は心の内奥において麻痺したような (paralysiert) 感じがして、私はごくつまらない事柄についてもどう表現したらよいのかほとんどわからないというありさまであった」⁶⁾ と。

しかも当時のライプツィヒ大学の講義はゲ-テにとって魅力に富んだものとは言いがたく、当時の彼の心の空隙を埋めるに足るものではなかった。彼が専攻する法律の分野においてすら、彼が父親の許でなん度もくり返し学び、永久に記憶にとどめたことをあらためて学び直すという程度の範囲を出るものではなく、入学まもなくにして彼は法律の講義の教室に足をふみ入れることをしなくなった。更にゲ-テはひそかに期待をもって接した当時名声の高かったゲラートの文学もゴットシェットの文学も青春固有の性急さをもって真実なものを追求めるゲ-テの情熱の欲求を満たすに足るものではなく、それはすでに生命の涸渇した時代遅れの老人の文学であった。その他当時の流行の文学もまた、ただ華美と外観だけを競う薄っぺらな内容のない独自性 (Originalität) と性格 (Charakter) を欠いた模倣品ばかりであった。哲学、いわゆる当時はやりの講壇哲学 (Schulphilosophie) はごく常識的な見解の範囲を出るものではなく、有果 (fruchtbar) たらんとする青年達の精神に何ら裨益し、それを啓発する (aufklären) に足るものではなかった。論理学にいたっては、ゲ-テにとってそれまでたやすくやってのけていた精神の操作 (Geistesoperationen) にいちいち検討を加え、分解してかからなければならないという面倒な精神の足枷を背負いこませる以外の何ものでもなかった。後に『ファウスト (Faust)』の中でゲ-テが論理学をメフィストーフェレス (Mephistopheles) をして中世の拷問道具である「スペインの長靴 (spanische Stiefeln)」⁷⁾ にたとえて揶揄せしめているのは

この当時の彼の憤まんを代弁するものに他ならない。神学もまた当時の啓蒙主義の批判にさらされて、いわゆる自然理性の光に照らされて見る影もない薄っぺらなものとなり、その多くはいわゆる自然宗教 (natürliche Religion) の範囲を出るものではなく、世俗化の波にあらわれて、それは神霊のいぶき (der göttliche Geist) を生き生きと伝えるものではなくなっていた⁸⁾。

クルト・ヒルデブランド (Kurt Hildebrandt) は、「ゲ-テは15才にして理性的な啓蒙主義と学問上の専門主義の精神を (den Geist der rationalen Aufklärung und des wissenschaftlichen Spezialistentums) 本能的に拒否する」⁹⁾ にいたると言っている。ゲ-テは入学まもなくにしてその鋭利な精神によって当時の大学を支配するうつろな内容のない精神の荒廃をいち早く嗅ぎとり、人生の黄昏を迎えたフェウストさながらに諸学に絶望する。この時代全体を回顧して、彼の精神状況のみならず、当時の彼をとりまく時代状況全体を彼は「味気なく冗長でうつろな時代 (die wäßrige, weitschweifige, nulle Epoche)」¹⁰⁾ と呼んでいる。

このような時代の第2の特徴をあげるならば、それは不毛、無果 (Unfruchtbarkeit) ということになろう。ライプツィヒ大学での生活、それはゲ-テにとって不毛以外の何ものでもなかった。

ライプツィヒでは、学生が多少とも裕福で礼節をわきまえた人達とつきあおうとするならば、^{ガラント} 慇懃にならざるをえなかった。いうまでもなく、すべての^{ガラント} 慇懃さは、それがはるかに大きな生活様式の成果として咲きでてくるのではないならば、姑息で堅苦しいものとならざるをえず、又、或る視点からみるならば、愚かなものとして眼にうつらざるをえないものである¹¹⁾。

ライプツィヒの文化のすべてが、フランス文化の猿真似 (Nachäfferei)、型にはまったものとして、ドイツ文化の独自性を欠いていた。その

風俗的な粉飾が慇懃さ (Galanterie) であった。ライプツィヒの市民社会はフランス文化の植民地 (Kolonie) と化し、それはフランス的な習俗の典型 (ein Musterbild französischer Sitten) を示していた。それは上記のうすっぺらな啓蒙的精神から発する批判と擬似フランス的なロココ趣味にうつつをぬかすにとどまり、力強い生命力をもたず、何ら積極的な建設的な意欲を示すものではなかった。そこに支配する擬似フランス的な文化は前途に有為、有果たんとする青年のよしとするに値するものではなかった。かえって青年の前途を曖昧ならしめ、困惑に落とし入れるだけで、ギュンター・ミュラー (Günther Müller) も言うように、「それは完全なるものと有果なるものへのいかなる展望をも開かなかった。」¹²⁾ 更にはK・ヒルデブランド曰く、それは「生産的な働きを禁じ、新しい道を指示するどころか、氣勢を殺ぐもの」¹³⁾ であったと。

しかし、人生の指針を見失ったゲ-テは、その擬似フランス的なガラントリーに一旦はうつつをぬかし、自らの内面の無内容をそれによって糊塗し、やがては自らそれに絶望する。この時代のゲ-テの第3の特徴をなすものは、この青春の不毛さから生じる「退屈 (Langeweile)」の気分である。この時期のゲ-テの生活は「無限の退屈 (die unendliche Langeweile)」¹⁴⁾ 「気晴らし (Zerstreuung)」, 「分散 Zerstückelung」¹⁵⁾ 「時間つぶし (Zeitverderb)」¹⁶⁾ 以外の何ものでもなかった。この時期のゲ-テはいかなる精神の集中も、生命の輝きも深きも、創造性も、誠実さも欠いている。この時期のゲ-テの恋愛態度も又、およそそれ以後のゲ-テとは違って、単なる感情の気まぐれ以外の何ものでもなく、それをギュンター・ミュラーは「ロココ的な好色 (die Rokoko-Erotik)」の限界を出ないものであると言っている¹⁷⁾。そういった現実の彼の生活態度はケートヒェン・シェーンコプフ (Käthchen Schönkopf) との恋愛態度の中によくあらわれている。当時の彼女との状態についてゲ-テはこう記している、「し

かし、そのような状態は、それが罪のないものであればあるだけ、長くつづくに変化に乏しくなりがちで、私はつい我々が落ち入りがちなあの悪癖にさそわれて、恋人を苦しめて楽しもうという、或いは少女の従順さを勝手な暴君的な気まぐれで思いのままにしようというような気になったりした。私の詩作の試みが失敗したり、或いはそれがどうもうまくいかなかったり、いろいろとおもしろくないことなどがあつたりすると、その自分の不機嫌を彼女におつけて、それでいて彼女に我慢を強いるということが自分には許されているんだなどと私は信じてこんでいた。というのも彼女は心から私を愛してくれていたし、できることでさえあれば、いつも私が気に入るように努めていてくれたからである。根拠のないつまらない嫉妬から、私は私と彼女の最も素晴らしい日々を台なしにした。彼女はしばらくは信じられないほどのしんぼう強さでそれに耐えていたが、私は最後には残酷なまでに彼女の忍耐をそのぎりぎりのところまで追いつめていった。』¹⁸⁾ ある時 たまたま散歩に出た折りに、ゲ-テは菩提樹にかつてきざんだ自分の名前と、その上にきざんだ彼女の名前を目にするが、その彼女の名前をきざんだ切り口からは多量に樹液が溢れ出て、その樹液の涙で自分の名前のすでにカサカサにかわいていた切り口をぬらしていたのを目にしたという。あたかもその樹液の涙で彼女が自分に対して、嘆き、訴えかけているかのようにゲ-テには思われる¹⁹⁾。

ここには後にヘルダーによって非難される精神の集中、深みを欠いたライプツィヒ時代のゲ-テの遠心的な性向がみられる。この時期、まわりの知的、精神的環境は何ら真に啓蒙的に、「真に教育的な態度をとる (recht pädagogisch verfahren)」²⁰⁾ ことがなく、専ら、それ迄のゲ-テの趣味、嗜好であったものに反対し、ゲ-テの喜びであったものを剝奪するばかりで、「それにとって代わるべき別のもの (etwas anderes dafür)」²¹⁾ を積極的に呈示してみせるということをしなかった。「そのために私はすっ

かり困惑してしまった (Ich kam darüber durchaus in Verwirrung.)」²²⁾ とゲ-テはこの時期の自分を回顧する。或いは又、こうも言っている、「そもそも自分にたいせつだったことについては何ら啓発される (aufgeklärt werden) ということがなかった。私は判断の基準 (einen Maßstab des Urteils) を求め、そしてそれをもっている人は皆無だということがわかったような気がした」²³⁾ 「この趣味と判断の不確実さが私をして日々ますます不安におとし入れ、その結果ついに私は絶望した (Diese Geschmacks-und Urteilsungewißheit beunruhigte mich täglich mehr, so daß ich zuletzt in Verzweiflung geriet.)」²⁴⁾ と。

このライプツィヒ時代のゲ-テを啓蒙思潮期のゲ-テとも呼んでもよからうが、この時期、ゲ-テはかつてなかった程の、或いはそれ以後決してなかった程の困迷の中におち入る。「私の本性は、青春のあり余る力に支えられて、放らつなまでの陽気さと憂うつな不快の間を極端に動揺していた。』²⁵⁾ その精神の不確実性と不毛と動揺の故に、彼の生活は自暴自棄なものとなり、彼は自他に対して精神的に加虐的になり、「道徳的に自分自身をこらしめるべく、さまざまのやり方で肉体的に自らを責めさいなむことによって自分自身の過ちに対して復讐しようとして、さまざまの馬鹿さわぎをやらした。しかしそれが結果的にははなはだしく肉体をそこなうことになった。』²⁶⁾ そして彼は言う、「そのために私は人生の最良の何年かを失うことになった」²⁷⁾ と。このようにしてゲ-テは精神的にも肉体的にも難破者として (als ein Schiffbrüchiger)、学業半ばにしてフランクフルトへと帰郷する。

しかし、一見徒費されたかにみえるこのライプツィヒ時代が、ゲ-テらしさ、ゲ-テ的なものの覚醒に不可欠な教育的効果をもたらす。ライプツィヒ時代の精神的根幹となった啓蒙思想がゲ-テに目にみえない逆説的な教育的効果をほどこす。啓蒙主義の一つの真実がゲ-テにも適用される。即ち、それはその批判的精神に

よってゲ-テから一切の曖昧な判断を払拭し、ゲ-テをして内面の真実へと真剣なまなざしを向けさせるきっかけをつくり出している。既にライプツィヒ時代の半ばに、「このような交際をしているうちに、会話、いろいろな実例を通して、或いは自分でよく考えてみることで思い知らされたのは、味気なく、冗長で、うつろな時代からぬけ出すための第一歩はただ明確さ (Bestimmtheit) と精確さ (Präzision) と簡潔さ (Kürze) によってのみ可能だということであった」²⁸⁾ というような反省が芽生えつつあるが、ライプツィヒ時代全体の破綻を通して初めてゲ-テは真に創造的な、真実なものへの目が開かれる。真に創造的なものへ向うためには、半端なものは払拭され、徹頭徹尾批判にさらされなければならない。ここに、それ自身は建設的なものはもたないが、創造的なものへの働きかけをつくる啓蒙主義の批判的精神の一つの真実の意味があると思われる。

そういった意味で啓蒙主義がもっともその本来あるべき姿で生産的に作用したのは、ライプツィヒ時代の年長の親友ベリッシュ (Ernst Wolfgang Behrisch) を通してであった。ギュンター・ミュラーは言っている、「ベリッシュの意図的な奇矯な行為と生まれながらのあてこすりをする性癖とライプツィヒ社会を嘲弄する態度を通して、彼はゲ-テの助言者ともなり、指導者ともなったが、とりわけゲ-テにとっての刺激的な聴聞者ともなった」²⁹⁾ と。ゲ-テ自身ベリッシュとの交際の中で、そのすぐれた批判的精神の影響を蒙るが、それによって、「私の詩作の方向は、……以後、完全に自然なもの、真実なものへ (zum Natürlichen, zum Wahren) 向うようになり、対象は未だ意義あるものたりえないにしても、私はそれでも純粋に (rein), そして鋭く (scharf) 表現するように努めた」³⁰⁾ (筆者傍点) とゲ-テは語っている。ここにいう「自然なもの」「真実なもの」こそ、次の疾風怒濤期のドイツ青年達の旗印ともなるものであり、「純粋に」そして「鋭く」という規範は、当時のロココ的なライプツィヒ文

化の文化的風潮である粉飾にみちた冗舌を否定するものであった。しかしベリッシュその人は、ついにはフランス的な啓蒙的知性の範囲を出る人ではなく、「批判」にこそ、彼の真骨頂があった。それによって彼はゲ-テが同時代の作家達に対してもっていたわずかばかりの信頼の念をも打ち砕いてみせた。しかるに彼の文学は依然、趣味 (Geschmack) の文学であるにとどまり、「彼はよいものと悪いもの、ありきたりのものと信頼に足るものについての一般的な判断といったものをもっていた」³¹⁾ にとどまる。「彼はまた、特にあらゆる粗野なもの (alles Rohe) に反感をもっていた。そして彼の冗談はゴテゴテとしてにぎやかではあったが、それについておよそ粗雑とか陳腐に (ins Derbe oder Triviale) おち入るということとはなかった。彼は同郷人に対しては妙にゆがんだ反感 (eine fratzenhafte Abneigung) をかくそうとはしなかった。たとえそういった人達が身分の高い人であったとしても、彼は彼らを面白おかしく風刺した。特に個々の人達をこっけいに描写することにかけては、彼の才能は憊むということをしらなかった。」³²⁾ かくてベリッシュも又、畢竟するに「時間つぶし (Zeitverderb)」「気晴し (Zeitvertreib)」の人であり、貴重な時間と才能を浪費して憊むということを知らなかった。「彼がひっくりめてやらかす冗談と馬鹿さわざは無限であった (Die Späße und Torheiten, die er insgesamt angab, gingen ins Unendliche.)」³³⁾ とゲ-テはベリッシュの気晴らしの猛烈さを後に『詩と真実』の中で評している。ベリッシュのこの凡俗を排する批判的精神はそれなりにゲ-テに対して教育的効果をもったとはいえ、そういった批判的な姿勢が青年に与える害は少なくなく、ゲ-テはむしろ成長過程にある青年にはいたずらにこのような姿勢で物事に接することのないように、特に卓越したものに対しては、かかる態度を慎しむことの大切さを説いて、次のように言っている、「せっかくの印象をばらばらにするような批判を加えずにそれを受け入れれば、それはいつしかひ

そかな実を結ぶことは、まったくはかりがたく重要である。青年は決して批判的になろうとなどせず、すぐれたものやりっぱなものを詮索抜きに、分析抜きに、すなおにその感銘を受けいれるならば、この至上の幸福にあずかれるものである」³⁴⁾と。しかし、そのベリッシュもゲ-テには極めて寛容で、その批判の多くはゲ-テをとりまく外部に向けられ、ゲ-テその人に向けられることは少なく、むしろゲ-テを多分に甘やかすところがあり、それ迄のゲ-テの怠惰で墮性的な生活を払拭するにはいたらなかった。その結果が、ライプツィヒ時代最後の咯血をとまなうゲ-テの大患であった。この病氣を通して、ゲ-テはそれ迄の自身の体内に蓄積してあったフランス的なロココ的な要素の多くを清算し、解毒するにいたる。

しかし、そのゲ-テのフランス的啓蒙的知性の残滓を完膚なきまでに否定したのは、シュトラースブルク時代の知友ヘルダーであった。それ迄の甘やかされた交友関係の中でなまくらになっていたゲ-テの知性をその真に厳しい試練の中に立たせたのはヘルダーであった。勿論、それ迄にもエーザー (Adam Friedrich Oeser) といった人達がゲ-テに良き影響を与え、古代美術の簡潔な美しさにゲ-テをして目を開かせ、フランス的ロココ的風潮にそまっていたゲ-テの芸術観をひそかに矯正することはあった。或いは又、クレッテンベルク嬢 (Susanna Katharina von Klettenberg) を通しての敬虔主義 (Pietismus) の影響も重要である。フランスの啓蒙的知性が涸いた知性であるとするなら、「敬虔主義は涸いた悟性に対しての心情の反動 (eine Reaktion des Gemütes gegen den trockenen Verstand) である」³⁵⁾ とは K. ヒルデブラントの言であるが、敬虔主義はその本質を殉情の中においており、その姿勢は対象への同化にあるということができよう。対象を冷たい、涸いた知性にさらすことによって、批判、検討、分析する以前に、対象に感情的に同化移入するところに、フランスの啓蒙的思潮への反動としてのドイツの敬虔主義の文化的意義

があったといえることができる。とりわけ、フランスの啓蒙思潮の中で感情の渇きに呻吟していたドイツ青年にとっての意義は重要である。しかし、そういった敬虔主義も又、その限界をもち、それはしばしば徹底性と深みを欠いており、ともすればそれは浅薄なセンチメンタルな感情主義に終始するものであった。

その反フランス的な方向を決定的ならしめ、その擬似フランス的なロココ的な風潮に鉄槌を加えるべく登場したのがヘルダーであり、彼がまずゲ-テに要求したのは、「既存のものの模倣 (Nachahmung des schon Dagewesenen)」³⁶⁾ 及び、「作為的な描写 (eine manierierte Darstellung)」³⁷⁾ の否定、「教養過多なるもの (ein Überkultivierte)」³⁸⁾ から生じる一切のものの否定、ロココ趣味的老人的なるものの否定であり、彼は真面目な青年に固有の真実な直接的な深みのある魂・感情から生じる一切のものをゲ-テに要求した。かかるヘルダーの精神的支柱はハーマン (Johann Georg Hamann) の哲学であり、ゲ-テもまたヘルダーを通してハーマンから深い影響を受ける。ハーマンの思想の中核は、分析的なフランス的知性に対して、精神の集中にあり、かかる精神の集中からこそ真に生産的なものが生じるとする。「ハーマンの一切の言説が帰着するところの原理はこうである、『人間が成就せんとする一切のものは、たとえそれが行為或いは言葉もしくはその他のものから生み出されようと、それは完全な統一された力から (aus sämtlichen vereinigten Kräften) 発現しなければならない。全ての個別化されたものは非難されるべきである』」³⁹⁾ このハーマンの格率こそが、ヘルダーが、ゲ-テが魂の底から共鳴したところの「覚醒の呼びかけ (Weckruf)」⁴⁰⁾ であり「導きの言葉 (Leitwort)」⁴¹⁾ であった。このハーマンの格率からはずれるものをヘルダーは完膚なきまでにうちめす。この意味でヘルダーも又、批判の人ではあるが、フランス的批判がゲ-テには不毛なものとして唾棄されるべきものであったのに対して、ヘルダーのそれは批判のための批判では

なくして、創造のための批判であり、不毛なもの的一切を一掃し、完膚なきまでに払拭、否定しることによって「未曾有のもの (etwas Unerhörtes)」⁴²⁾ をドイツ精神の中に築きあげんとするところにあり、そこにこそヘルダーの野心がある。そこにまたその批判の真面目^{しんめんぼく}があったということができよう。この批判にゲ-テは自虐的なまでに苦痛を恐れることなく自らの精神をさらす。

ハーマンのいう「人間の完全な力の統一 (die Vereinigung sämtlicher Kräfte im Menschen)」⁴³⁾こそが人間に生産的 (fruchtbar) であることを約束するものであり、しかも個人の青春の力の中に、民族の青春の力の中に、この人間の統一的な力の端的な発現がみられるとするのがヘルダーの見解に他ならない。天才 (Genie) にこそ個人のかかる力の真に卓越した発現があり、民族の声 (Stimmen der Völker) である民謡 (Volkslied) の中にこそその民族の青春の力の端的なあかしがみられる。このような観点にたつて、ゲ-テはヘルダーのすすめもあって、ドイツに残された民謡、とりわけエルザス地方に残る民謡を蒐集し、或いはドイツの天才の一人であるエルヴィン・フォン・シュタインバハ (Erwin von Steinbach) が、更には稀有の天才シェイクスピア (William Shakespeare) がゲ-テによって渴仰^{かつおつ}的^{てき}とされる。ヘルダーによれば、民族には「4つの季節の変化 (die Gezeiten)」というものがあって、それは人間の4つの発達段階に対応するという。即ち、それは子供 (Kind)、青年 (Jüngling)、成人 (Mann)、老人 (Greis) の段階で、この発達の第二の段階である「青年の年令 (das Jünglingsalter)」こそが「真に詩的な即ち創造的な段階 (die wahrhaft poetische, nämlich schöpferische Stufe)」であるという⁴⁴⁾。ヘルダー-或いはゲ-テによれば、詩的なものこそが創造的であり、それは青春の力のうちにこそ発現する。青春の叫びはそのままた詩 (Poesie) であり、創造であり、天才の力となってあらわれる。民族としての青春の力の端的なあらわれ

は、古代ギリシアの文化の中にみられ、今、ドイツが、疲弊しつつあるヨーロッパ精神の中で、ヘルダーによって、その力の端的な発現の担い手として待望される。ヘルダーが古代 (die Antike) を評価するのは、そこに過去の遺物をみるからではなく、彼が評価するのは、そこにみられる若々しい「形成する力 (gestaltende Kraft)」⁴⁵⁾である。ヘルダーは敢えて、所謂ルネサンスを「第一のルネサンス (die erste Renaissance)」⁴⁶⁾と呼び、それが「ラテン的なものの支配下における (in der Vorherrschaft des Lateinischen)」⁴⁷⁾ギリシア文化の復興であったのに対して、彼が待望する「第二のドイツのルネサンス (die zweite, deutsche Renaissance)」⁴⁸⁾は、疲弊せるヨーロッパ精神の若がえりの運動として、第一のルネサンスの「老齡の凝固せる形式、キケロ的意味でのフマニスムス、ヘレニスティシユな形式の一般的な妥当性、西ヨーロッパの合理性に対立する (gegen die erstarrende Form des Alters, den Humanismus in Ciceros Sinne, die Allgemeingültigkeit der hellenistischen Formen, den Rationalismus Westeuropas)」⁴⁹⁾ものに他ならない。

このようにして青春と天才と詩と創造が、ゲ-テにとって同義語とされる。エルヴィン・フォン・シュタインバハ、シェイクスピアという天才を通して、今、ゲ-テには天才的な青春の力の予感、偉大なもの・崇高なものに対する力強い予感が芽生える。かかる天才達を通して、ゲ-テは若々しい魂の創造的な力、ラテン的な西ヨーロッパ的な凝固せる形式主義と合理主義に対立するゲルマン的な躍動し、流動し、力の横溢する魂の、つまりはドイツに固有の青春の力を予感する。ひいては、新しい時代の胎動を自らのうちに予感する。「ふしぎな予感にみちた仕合わせだったあのこの (Jene wunderbaren, ahnungsvollen und glücklichen Tage)」⁵⁰⁾とゲ-テは後にこの時期を回顧している。

三 ゲ-テ的なものの覚醒

ライプツィヒ時代の終りに、ゲ-テは大病を患い、学業半ばにして、人生の難破者として故郷フランクフルトに帰還する。その後、生死の境をさまようが、不思議な霊薬によって命をとりとめ、しばらくは、ゲ-テにとって精神を窒息させる魂の巣窟ともいべき故郷の家で、ゲ-テは療養につとめていたが、1770年、「春になって、自分の健康が、そしてそれ以上に青春の英気がいきいきとよみがえってくるのを感じる」⁵¹⁾ ようになる。再びしなやかさをとりもどした精神と、予感にみちた感興にひたされて、あたかもエルヴィン・フォン・シュタインバハの霊に導かれるかのように、彼の建てた大聖堂のあるエルザス地方のシュトラースブルクへと旅立つ。この予感にみちた青春の感興を吐露する『詩と真実』の中のその箇所は、就中その魅力に富んだところであるということができよう。ゲ-テはシュトラースブルクに着くや否や、旅館に荷をといて、すぐその足で、エルヴィン・フォン・シュタインバハの建てたその靈感にみたされた大寺院へとおもむく。「私は今はじめて、狭い小路の間からこの巨大なものをみとめ、しかも確かに狭すぎるその場所で、余りにも近くその前に立ったので、その堂宇は私には独特の印象を与えた。しかし、その印象をその場ではときほぐすこともできず、その時はただ漠然とした印象を受けとったにすぎなかった。しかし、高く晴れやかに輝く太陽が、はるか遠く豊かにつづくその地方を明らかにてらし出してくれるすばらしい瞬間を逸するまいとして、私はその堂宇の階段を上へと一気にかけ上った。」⁵²⁾「それから私はその堂宇の上から、私がこれから住むことになるそのすばらしい地方をながめやった。見事な街と、広く一面にひろがって、ところどころにみごとに樹木が密生している牧場、ライン川の流れにそって、河岸、島、中洲の点在するその草木のめだって豊かなところがそこからながめられた。南から下に広

がる平地もまたそれに劣らずさまざまな緑におおわれ、その一帯をイル川がうるおしていた。山の方へとつづく西の方にも多くの低地があり、それは森と牧草地の魅力的な眺めで、更に北の一段と起伏にとんだあたりには、数多くの小さな川が流れていて、一帯の草木のすみやかな成長を助けていた。この豊かに広がる牧草地、このみごとによくおいしげった森の間であって、すべての果樹に適した土地が立派に手に入れられ、緑ゆたかに実り、その最もすばらしい肥沃な一帯のここかしこには村や農場が点在していた。新しい楽園が人間に用意されているようなこの見晴らし難く大きな平野には、遠くそして近くに、よく手入れのゆきとどいた山々が、又うっそうと樹木の生い茂った山々が境界をかたちづくっていた。このような光景を心に描いてもらえるなら、私のこの時の感激はよく理解してもらえることと思う。私にしばらくこのような定住地をさずけてくれた自分の運命に対して私は心からの祝福を自分自身に対して感じないわけにはいかなかった。」⁵³⁾「我々がしばらく滞在することになる新しい土地のそのような新鮮ながめはなお独特の予感にみちていると同時に心地よいもの (das Eigne, so Angenehme als Ahndungsvolle) があった。それはちょうど何も書かれていない板切れを目の前にするのと似ていた。未だ我々に関わりのあるいかなる苦悩も喜びもそこにはしるされていない。この晴れやかな色どり豊かな生き生きとした平野はなお我々に語りかけるべき何ものももっていなかった。」⁵⁴⁾ (筆者傍点) ここにゲ-テは意味深長な表現を与えている。即ち「いまだ我々に関わりのあるいかなる苦悩も喜びもそこにはしるされていない」と。この言葉は逆に、これ以後の彼とフリーデリケとの運命を暗示している。この白紙にも似た場所こそが、ゲ-テが終生にわたって新鮮なときめき、心の高ぶりを反芻することになる場所、と同時に、終生ゲ-テから去ることのなかった苦悩と嘆きの源泉ともなった場所でもある。「対象がそれ自体意味のあるものである限り、眼はただその方へと

すいよせられるものであるが、しかし未だ私はいかなる愛着も情熱もここかしこに感じるということはなかった。しかし来たるべきものの予感 (eine Ahndung dessen, was kommen wird) がすでに若い心を不安なものにし、満たされない欲求は来たるべきもの或いは来るかも知れないものをひそかに待望している。そしてそれは幸せ、悲しみのいずれをとわず、知らず知らずのうちに我々が住むことになる地方の性格を帯びてきているものである。』⁵⁵⁾ この地方こそ「浮き沈みする運命のすべての苦悩と辛苦の彼方にある、これ以後ゲ-テの人生を揺らぐことなく支えることになるあの幸福な愛」⁵⁶⁾ を育んだ地方、即ちフリー-デリケ・ブリオンとの愛を育んだ地方に他ならない。しかし、ゲ-テからはフリー-デリケの名がなかなか口に出されてこない。E. シュタイガーも言っているように、「あたかも心の落ち着きを確認しているかのよう、彼は何度もその報告をし始めてはその都度中断する。思い出すのを憚っているかのよう。』⁵⁷⁾ それほどにゲ-テにとって意義深い名前——それがフリー-デリケ・ブリオンであった。

『詩と真実』の中で、フリー-デリケ・ブリオンは極めて印象的に登場する。「まことにこの田舎の大空に世にも愛らしい一つの星があらわれた」⁵⁸⁾ と。フリー-デリケは田舎において、とりわけ戸外においてこそ、生き生きとした魅力、生彩を放つ自然そのものの少女、自然の精と思しき少女、エルザスの「風景そのものの化身であるように自然な」⁵⁹⁾ 「活々とした魂そのもの」⁶⁰⁾ のような少女であった。

すらりとしていて軽快で、さながら彼女の歩みは何も身にまもっていないかの如くであった。そしてその可愛い頭のふさふさしたブロンドのお下げ髪にくらべて、そのうなじは余りに華奢にみえた。晴れやかな青い眼で、彼女はあたりをはっきりとながめ、その感じのいい丸い鼻は、あたかも世の中に何の憂い事も知らぬげに自由に大気を呼

吸していた⁶¹⁾。

彼女の物ごし、彼女の姿態は小高い丘の小道を駆けていく時ほど、めだって魅力的に見えることはなかった。彼女の物ごしの優雅さは野の花と咲ききそうばかりであり、彼女のかんばせの失われない晴れやかさは青い空と見まがうばかりであった。この彼女をとりまく人の心を活気づける大気を彼女は家の中にももちかえた⁶²⁾。

散歩の時の彼女は、命を与える精霊があらこちらとただようかのように、ここかしこに生じがちな空隙を埋める術を知っていた。そして彼女が駆けていく時、彼女はとりわけ魅力的であった。あたかも鹿がみちたりた気分で、芽の萌え出る草の上を駆けていくように軽やかに、何か忘れものをとりにいく時とか、失くしたものをさがす時とか、はなれたところにいる恋人達を呼びにいくとか、必要なものを注文しにいくとかする時に、あぜ道、牧草地をいそいで駆けていく時、彼女の動きはもっともはつらつとしていた。その時、彼女は決して息が切れるということとはなかったし、それによって平静さを失うということもなかった⁶³⁾。

このフリー-デリケを通して、これまでせき止められてあったゲ-テの自然が、ゲ-テの野生が、生命が、ゲ-テの情熱が堰を切って溢れ出す。フリー-デリケへの愛は、「彼の閉ざされた感官を押し開き、死せる胸に生氣をふき込む。』⁶⁴⁾ この意味で、ゲ-テの歓喜は単なる愛の喜びにとどまらない。自己の解放の、横溢する官能の、死してあった青春の生命の躍動する喜びに他ならない。それは又、青春の目覚め、初めて味わう青春そのものの喜びの体験であった。ライブツィヒ時代の病めるゲ-テはもうここにはいない。青春の健康を胸一杯に呼吸するゲ-テがここにいる。精神にも肉体にもものびや

かにゆきわたる生の充実、生の躍動、新生の喜び、彼の最初の真にゲ-テ的ともいふべきひびきが奏ではじめる叙情詩『五月の歌(Mailed)』において、彼はその生の喜びを爆発させる。その讃歌は単なる恋の讃歌にとどまらない、生の讃歌であった。

『五月の歌』の末尾においてゲ-テは叫ぶ。

熱い血潮たぎらせて

私はきみを愛する。

新しい歌と

踊りにそえて、

私に青春と喜びと

勇気を与えてくれるきみ。

永遠に幸福であれ、

きみの私へと愛とともに⁶⁵⁾。

この「青春と喜びと勇気」、これをゲ-テに呼びさましたのが、フリー-デリケ・ブリオンであった。この愛を通して、彼が求めて止まなかった一切を彼は今、手中におさめる。青春、力、生命、自然。

しかもこのフリー-デリケ・ブリオンとのゲ-テの愛の著しい特徴は、E. シュタイガーも言うように、極めて感覚的な敏感さ、そのたゆとうごとき官能の豊かさにも拘らず、そこには好色的なものの一切がないということである。「ゲ-テはこうしたこととは無縁である。フリー-デリケとの出会い以来、彼の文学からは好色(die Lüsternheit)が消え失せ、以後、決してそれはあらわれることがない。——ヴェネチアのエピグラムにおいても、ローマ悲歌においても、それはあらわれない。」⁶⁶⁾ しかも彼の愛の感情の著しい特徴は、その愛の根源性であり、それは愛のたわむれにみちたロココ的な薄っぺらな感情の皮膜をつき破る。それは生の感情の根源に根ざすものであり、かかる愛において、愛と生きることとは同義となる。それ故に、ゲ-テはフリー-デリケへの愛を通して、生きることの実感をとり戻す。そこにゲ-テにとって、

フリー-デリケが単なる恋人以上にかけがえのない存在としての意義をもつ所以が存する。しかもこの愛につけ加えるべきもう一つの特徴は、その一種、宗教的な万有感情にあり、この根源的な一体感にひたされて、彼は自らの「愛を大胆にも神聖な——heilig と呼ぶ。」⁶⁷⁾ そしてそこから生じる自然、力、生命も又、同時に神聖な——heilig なものと呼ばれるに値する。そこに感得される感情は、生命豊かな青年のみが感得しうる崇高なもの・偉大なもの・永遠なものをも実感せしめる。フリー-デリケへの愛を通して、ゲ-テにはかつてなかったような偉大なものへの感興が高まり、それはやがて、時に倨傲なまでにと呼んでもいいような疾風怒濤期ゲ-テの巨人的な感情にまで発展していく。これこそゲ-テが暗い魂の鉱道の中で掘りあてるべく努め、求めて止まなかったところの魂の鉱脈であった。生の根源性、偉大なものへの情熱、ここにはっきりとゲ-テは自らの出発点とすべき生の原点を発見する。

勿論、このようなゲ-テの魂の鉱脈を掘りあてるべく援助をおしかなかった人物としてヘルダーがいることは既にみたところである。なまくらに萎えた彼の精神を加虐的なまでに叱咤激励しつつ、熱い鋼鉄へと鍛え上げたのは、このヘルダーであった。或いは渴いた知性にかわって、うるおい豊かな感情を切に求める敬虔主義^{ビエティスム}、とりわけクレッテンベルク嬢の影響も見のがし難い。又、彼の渴仰の的であったシェイクスピア、エルヴィン・フォン・シュタインバハといった天才が彼の天才覚醒のひきがねともなり、彼の心を鼓舞し、啓発したことも事実であり、これらの諸々の影響力が、彼の「ゲ-テ的なもの」の鉱脈の発見に手をかしたことは明白である。とはいえ、最後の壁を内側から突きくづし、打ち破るために必要であったのは、このフリー-デリケ・ブリオンへの愛をおいて他にはない。ゲ-テ的な情熱を点火、爆破させ、ゲ-テをして自らの生の根源、魂の鉱脈へと到達せしめ、それを発見せしめたのは、このフリー-デリケ・ブリオンへの愛をおいて他にはない。

四 罪なき罪

フリーデリケとの類いまれな愛の幸福の絶頂の中で、ゲ-テが全我的といってよい程に、手ばなしに我を忘れ、陶醉できたのは半ケ年余りのことである。やがてその至福にみちたかにみえる愛の日々にもかげりが見え始める。

フリーデリケとの出会いの叙述に先立って、ゲ-テは『詩と真実』の中に、或る舞踊教師の二人の娘との奇妙な物語を挿入している。そしてこの——E. シュタイガーも言うようにおそらくは虚構の⁶⁸⁾——物語がゲ-テとフリーデリケとの出会いを初めから不吉なものにしている。その物語とはこうである。この舞踊教師の姉娘はひそかにゲ-テに恋をしていたのであるが、妹がむしろゲ-テの心を射止めているのを嫉妬した姉娘は別れを前にして、無理矢理にゲ-テの唇を奪い、そして妹へのみせしめにこう叫んだという、「私のあとにこの唇にキスする女に永遠に不幸がつづくがいい」⁶⁹⁾と。これだけの話ではあるが、これが若いゲ-テの心にひそかなこだわりを生み、ゲ-テは以後、女性に対しては慎重に振る舞うようになったという。フリーデリケと出会ってから、ゲ-テはこの呪いの言葉を忘れることが出来ず、フリーデリケとのくったくのない愛の日々においてさえ、この言葉がゲ-テに自制心を生み、フリーデリケとの関係に節度をもたせることになったとゲ-テは言っている。愛の不安の中にある者が極めて迷信深いことは又事実であろう。

しかし、この虚構と真実の交錯する『詩と真実』の中にこういった物語を伏線として挿入せざるをえなかったゲ-テの真意はどこにあるのであろうか。木村 謹治氏はこう語っている、「およそ彼の恋愛史においてフリーデリケに対する程外部からの故障なしに純なる愛を十分に経験したものはない。従ってライプツィヒのケ-トヒェンに対する様な感情の動揺、愛情と嫉妬との葛藤の交錯を体験する必要はなかった。それだけ、この度は感情の動きにおいて全我的

であり、その変化や動揺の形式においても、その原因を自己以外に存在する何物にも帰することができない。フリーデリケとの恋愛の悲劇的結末を説明するに際し、その原因の或る部分を運命的なる事件に帰しているのは、この恋愛が如何に二人だけの至純なる関係に終始したかを語るものであって、それだけにかつて感じた事のない自責の念に襲われたのである」⁷⁰⁾と。フリーデリケとの愛の破綻の原因を一つの不透明な運命的な事件に帰しているかのように叙述しているのは、逆にゲ-テにとってフリーデリケとの関係が外部的には何らの支障もなかったことを証しするものであると同時に、ゲ-テにとって、フリーデリケとの愛の破綻が如何に不可解なものであったかを証しするものであるということができよう。

1770年の二度のゼーゼンハイム訪問の後、1771年、春、ゲ-テは一ヶ月ほどにわたってゼーゼンハイムに滞在する。この滞在の期間中にたまたまフリーデリケの家の牧師館で近在の人達の寄り合いがあり、そのにぎやかな集いの中で、いよいよゲ-テとフリーデリケの愛は高まりをみせ、ゲ-テも踊りの輪の中で踊り狂い、歓喜に酔いしれ、ゲ-テからはあの憂うつ症的な迷信的な妄想はあとかたもなく消え失せ、フリーデリケを接吻する機会があれば、ゲ-テはそれを逸することをしなかった。その夜、二人は心から抱擁し、心底から愛し合っていることを誓い合い、確認し合う。しかし、そのあと「2・3時間もぐっすり眠りこんだであろうか、ふと、熱い、胸さわぎのするような血潮を覚えて、私は目が覚めた。このような時とか状態において、不安とか後悔の念がふいに無防備に身を横たえている人間をおそうことはよくあるものである」⁷¹⁾というように、瞬間、反省の思いにゲ-テは襲われる。ゲ-テには今まぎまぎと舞踏教師の姉娘の呪いの言葉がよみがえってきて、その言葉を吐きつつ胸をふるわせて走り去った娘の姿が思い出される。その時の不安の思いをゲ-テは次のように表現している、「そして今、私には彼女の私への愛がまことに不幸な

もののように思われて、私は遠く、山のはるか彼方に逃れていきたいような衝動にかられた」⁷²⁾。しかし、夜が明け染めるにつれて、又、日が高くなり、フリーデリケのくったくのない喜びに溢れた表情を見るに及んで、その夜の思いがけない不安な思いは雲消霧散していく。しかしそれ以後、ゲ-テには以前のような有頂点は失われ、楽しくはあるが、同時に不安な、反省的な気分を促すような、その後のゲ-テの心の冷却を予知するような事件がいくつか重なって後、ゲ-テのいう「私たちの愛は今一つの奇妙な試練を受けなければならなかった」⁷³⁾ という時を迎える。ある時、フリーデリケの家族がゲ-テの滞在しているシュトラースブルクの親戚の許へとやってくる。しかし田舎でこそはつらつとした生命感を漂わせるフリーデリケと姉のオーヴェエは都会の狭苦しい家の中では生彩を欠き、特に「オーヴェエは陸に上った魚のように耐え切れないという風情をみせた。」⁷⁴⁾ それでもフリーデリケは都会というなじめない環境の中にあっても何とか魅力を保ち、まわりの人達を楽しませる。ゲ-テはフリーデリケには好意的に、次のように評している、「ほんとうは彼女もこのような環境にじっくりとしてはいなかったのだ。しかしこのような状態にあっても、彼女が知らず知らずのうちにその状態を自分にあうように作りかえる術を知っていたというのは、彼女の性格をよくあらわしていた」⁷⁵⁾ と。しかし、フリーデリケも生彩を欠いていた事は事実であろうし、二人の愛がこの都会では極めてぎこちないものとなったことは事実であろう。恋人達にとって長く辛いこのフリーデリケ家のシュトラースブルクでの滞在の後、やっと晴ればれとした表情でフリーデリケ達は田舎へと帰っていく。その時の感想をゲ-テは次のように言っている、「急に心から石のようなつかえがとれたような思いだった」⁷⁶⁾ と。

このようにしてフリーデリケのゲ-テへの思いはそうでなかったにせよ、ゲ-テのフリーデリケへの思いにはかつての一途な有頂天さとい

ったものが失われ、いつのまにか心の中に空隙のようなものがしのびこむようになってくる。この当時のゲ-テの感慨はゼーゼンハイムから友人のザルツマン (Johann Daniel Salzmann) に宛てた手紙によくうかがわれる、「おまえの子供の時から夢は今ことごとくみたされたのではないか？ 私はこの幸せにみちた地平線を喜ばしげにながめやりながらしばしば自らに問いかける、これこそがおまえが憧れ求めていた妖精達の住む仙境ではないのか？ これがそれではないか！ たしかに私はそう思う。友よ、しかし、望んでいるものを手にした時、人は少しも幸せにはなってはいないのだ」⁷⁷⁾ と。ゲ-テの関心はシュトラースブルクへやってきた当面の課題であるライブツィヒでは果たせなかった卒業論文の仕事へと向う。或いはシュトラースブルク近郊の土地への行楽が頻繁に行われるようになる。「私のフリーデリケへの情熱的な関係がいよいよ不安なものになるにつれて、私はこのような気晴らしと遊興にますますずんずん身をまかせようになった。」⁷⁸⁾ 「フリーデリケのいるところでは私は不安な気持ちにおそわれたが、彼女のいないところで彼女の事を考え、彼女と語り合うことは、私にとってこの上ない喜びであった。」⁷⁹⁾ 「彼女のいないことが私を自由にし、はなれていて語り合うことではじめて私の彼女への愛着は十分に花開いた。」⁸⁰⁾ このようにして愛の直接性は失われる。このような愛の高揚と冷却をゲ-テは次のように花火にたとえて表現している、「このような若い時代のいきあたりばったりの愛着は夜空にうちあげられた花火にも似ている。それはゆるやかなまばゆい線を描いて夜空に舞い上り、星の中にまぎれこみ、瞬間そこにとどまるかにみえて、再び下降線を描きつつ逆に落下し、その弾道を終えようとするそのまぎれに、それは爆発をひきおこす。」⁸¹⁾ やがて別れの時がやってくる。しかしその別れは極めてさりげなく語られる。「このような衝動と混乱の中で、しかし私はもう一度フリーデリケに会わずにはいられなかった。それは辛い日々ではあった。その思い出は

もう私には残ってはいない。私が彼女に馬から手をさしのべた時、彼女の眼には涙が浮かんでいた。私は胸ふさがれる思いがした」⁸²⁾と。そしてゼーゼンハイムからの帰途、ゲ-テはあの有名な幻視体験をする。ゲ-テは「八年後、その時に幻で見た服装で、それも自分ですすんで選んだわけではなく、たまたま身に着けた服装で、もう一度フリーデリケに会うために同じ道をたどる」⁸³⁾ことになるが、その八年後の自分の幻影が向こうから馬に乗ってやってくるのに出会う。「ところで、このことにどういう意味があるかと、この不思議な幻影は、この別れの瞬間の私の気持ちをいくらかでもやわらげてくれた。ここで得たすべてのものと共に、このすばらしいエルザスを永久に立ち去るんだという心の痛みはやわらげられ、私は別れの辛さからようやく立ち直って、再びおだやかな晴ればれとした気持ちで旅行をつづけることができた」⁸⁴⁾と、ゲ-テはフリーデリケとの別れを淡々と語り終える。

しかしフランクフルトに帰ったゲ-テの許にフリーデリケからの手紙がとどく。「私が手紙で書き送った別れの言葉に対するフリーデリケの返事は私の心を引き裂いた。そこに書かれてあったのは、私のために彼女がつつかしてきたその同じ手になる同じ心の同じ感情であった。今はじめて私は彼女の蒙った損失を感じた。そしてそれを埋めるすべも、やわらげるすべもないことをさとした。グレートヒェンは私から奪いとられ、アネッテは私を捨てたが、今度という今度のはじめて私の方に罪があった。私は世にも美しい心にその最も深いところで傷を負わせたのだ。」⁸⁵⁾ここにいたって初めてゲ-テはフリーデリケへの断腸の思いを口にする。

しかしそのフリーデリケとの出会いと別れをどう理解するべきか、永くゲ-テにはわからなかった。「今度という今度は初めて私の方に罪があった。私は世にも美しい心をその最も深いところで傷つけたのだ」ということは事実であった。しかしそれでは自分はどうすべきであったのか、あれほどまでにくたなく、我を忘

れ、心ゆくまでお互いの愛情を満喫しきったその恋がどうしてやがて収縮し、終末を迎えることになるのか、この成算なき恋に身を委ねたことに自分の罪があるのだろうか。「憎からず思っている男性を断念する少女には、恋心を女性に打ちあげた男性がおち入りがちな困難な立場に長く立たされることはない。しかし男性はつねに辛い役割を演じることになる。というのも、男性は成人しつつある男性として自分のおかれている状況についての或る程度の見通しをもっていることが要求されるからであり、あまりにはっきりとした軽率な態度は男性には似つかわしくないとされるからである。少女が自ら身をひく理由はいつも正当なものとされるのに対して、男性は決してそうはいかないのである。」⁸⁶⁾ 　　こういうゲ-テの発言の中に、罪の否定し難い事実は認めながらも、罪はいったいどこにあるのかについての理解にとまどいが見られる。それ故に、ゲ-テはこの恋に先立って、舞踏教師の娘との出来事を伏線としておかざるをえなかったのであり、それほどにこの恋の破綻の原因には不明瞭なるものがあつた。ゲ-テが恋人の許にとどまることも考えられぬことではない。しかしそれはかえってお互いの情熱への不誠実ではないだろうか、情熱が萎えた今となっては、別れてそが自然ではないだろうか、しかし、自然の流れに従うことがはたして罪なのであるだろうか。少くともゲ-テは自己に忠実ではあつた。しかし、それがフリーデリケへの不実となり、フリーデリケに忠実であることは自己への不実となる。罪はいったいどこにあるのか、このジレンマに回答を出せないままに、ゲ-テはフリーデリケの許を立ち去らざるをえなかった。しかし、これによって決定的な悲劇的な結末は回避しえたということも出来る。少くとも『ファウスト』の「グレートヒェン悲劇」のような悲劇は回避することができたということでは出来るであろう。しかし、そういう悲劇への予感をゲ-テはこの時にはっきりともつことになる。後年ゲ-テはエッカーマン (Johann Peter Eckermann) に語っている、「もしわた

しが自分の好きなように振る舞うことがあれば、わたし自身はおろか、わたしの周囲の人々をまでも破滅におとし入れるようなものが、わたし自身のなかにあったであろう⁸⁷⁾と。痛切なまでの歓喜にみちた情熱の嵐の中にフリー-デリケをまきこみ、そのあげくに彼女をそこにおきざりにせざるをえなかった心の痛みをこの時、ゲ-テははっきりともつことになる。しかし、このフリー-デリケとの別れを余りに大袈裟にうけとることは、この二人の恋に相応しいことではない。断腸の思いを残したとはいえ、それは後年に至っても懐しく、いとおしく、美しい思い出として想起せざるをえない牧歌であった。『野ばら』の詩の余韻こそがこの二人の恋には相応しい。

しかし、フリー-デリケとの恋はその程度に終わったとはいえ、ゲ-テが人間の情熱というものの不可解さ、不透明さ、ゲ-テ自身の中にある衝動のその見通し難さに直面し、とまどい、自らの方向性を見失った事は事実であった。ゲ-テがそれ迄に培ってきた教養の一切を否定し、自らの生の原点として肯定し、自らの創造の原点と認め、それによって青春を謳歌せんとしたその情熱の方向性を見通し難さからくるとまどい——。ここに一挙に疾走するかにみえたゲ-テの歩みに一つの渋滞が見え始める。生の歓喜をもたらす源泉とみえたゲ-テの情熱に一つのかげりがみえ始める。創造の源である筈の情熱はまた破滅の源でもあるということをゲ-テはここに初めて予感する。しかし傷を負ったとはいえ、ゲ-テはこのフリー-デリケとの愛を通して覚醒せられた情熱を支えとして青春をつづける。この情熱の中から疾風怒濤期ゲ-テの諸々の作品が生み出される。その疾風怒濤期ゲ-テの悲劇、それを最も先鋭化された形で、最も端的に形象化し、作品化したのが、他ならぬ『初稿ファウスト (Urfaust)』の「グレートヒェン悲劇 (Gretchen-Tragödie)」であった。もっともフリー-デリケ体験の形象化は『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン (Götz von Berlichingen)』或いは『クラヴィーゴ (Cla-

vigo)』において、ヴァイスリンゲン (Weislingen) の、クラヴィーゴのそれぞれの恋人への不実という形でなされてはいる。ゲ-テは言っている、「フリー-デリケの身の上を考えて、その心痛が私をたまらなくさせる時、私は古くからの習慣に従って、この度も詩作に助けを求めた。再び私はこれ迄の習慣になっている詩的懺悔 (die hergebrachte poetische Beichte) をつづけた。そして何とかこの自分を懲らしめる罪ほろぼしによって心の免罪を得ようと努めた。『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』と『クラヴィーゴ』の二人のマリーとその恋人である二人の不実な男はこのような後悔の念から生み出されてきたものであった⁸⁸⁾と。しかし、この形象化は、ゲ-テの自らへの断罪の意味をこめてのものであったとはいえ、そのゲ-テの内実からは程遠い。この2人の男の不実、世の栄達を得んがための打算にみちた男性の不実であって、これはゲ-テの体験を矮小化し、浅薄化するものであって、フリー-デリケ体験の悲劇の真相をその内実にそって形象化したものとは言い難い。フリー-デリケ体験の重みはその悲劇の不可避性とその罪の不透明性にこそある。フリー-デリケの許にとどまることは、ゲ-テの情熱をもってしては不可能であり、たとえとどまったにせよ、その悲劇は避けえなかったであろう。自らを破滅から救い、一人の少女を捨てて新たに自己の歩むべき道を修正し、新しい人生を歩み始めるということが非難されるべき選択なのであるうか。

フリー-デリケはしばしばゲ-テに楽しげに自分をとりまく「小さな世界 (die kleine Welt)」⁸⁹⁾について語ったという。或いはフリー-デリケが好んで散歩する小道のベンチの一脚には「フリー-デリケの安らい (Friedrikens Ruhe)」⁹⁰⁾と書かれた板切れがかかげられてあったという。そういうフリー-デリケの「小さな世界」をゲ-テはかきみだし、「フリー-デリケの安らい」に波風をたて、以後、フリー-デリケの心には、かつての彼女の面目でもあったその生の喜びの直接性が失われてしまったことは事

実であろう。しかし、少くともファウストがグレートヒェンを破滅させたように、完膚なきまでにゲ-テはフリー-デリケを破滅させたわけではない。ゲ-テは節度を保ち、決定的な破滅の一手手前で、フリー-デリケの許を立ち去ったとすることができるであろう。ゲ-テとしては精一杯、フリー-デリケに対して誠実であったとすることができるであろう。しかし、罪は罪、不実是不実であった。しかし、その罪の罪たる所以はどこにあるのか。人生の寵児といわれるゲ-テが避けようとして避けえなかった悲劇の根源はどこにあるのか。それに対してゲ-テは直接には答えることなく、フリー-デリケ体験を先鋭化して「グレートヒェン悲劇」という形で形象化するとどめる。

五 結び——ゲ-テの Enthusiasmus

ロルフ・クリスティアン・ツィンマーマン (Rolf Christian Zimmermann) は若きゲ-テの言動、作品の源泉を Enthusiasmus に帰している。この Enthusiasmus には「靈感、感激、熱狂、恍惚、有頂点」等の訳語があてがわれ⁹⁰⁾、Enthusiast には「感激家、熱狂家、狂信者」といった訳語があてがわれるが、しかしこれらの訳語をもってしては、Enthusiasmus 或いは Enthusiast の内容はとうてい推し測ることはできない。ツィンマーマンは Enthusiasmus をこう定義している、「完全なるものと無限なるものによって自らを充填すること (sich mit dem Vollkommenen und Unendlichen zu erfüllen)」⁹²⁾「神秘的なものの充実との一体化の中で自己を忘却し、自己を放下すること (sein Selbst zu vergessen, es aufzugeben in der Vereinigung mit der Fülle des Göttlichen)」⁹³⁾「その個人的な存在をより高きものへの犠牲に供すること (sein individuelles Sein dem Höheren zu opfern)」⁹⁴⁾「感情の充実、感情の至福、無限なるものの名伏しがたい充実 (die Gefühlserfüllung, die Gefühlslosigkeit, die namenlose Fülle des Unendli-

chen)」⁹⁵⁾「躍動的な熱狂的な感情 (ein schwingungvolles, mitreißendes Gefühl)」⁹⁶⁾「無限なる充実と神秘的なものの完全性に満たされてあること (das Erfülltwerden von der unendlichen Fülle und Vollkommenheit des Göttlichen)」⁹⁷⁾等々。この Enthusiasmus をゲ-テはフリー-デリケ・ブリオンとの愛を通して覚醒する。フリー-デリケの愛をえて、ゲ-テはまさに自分の求めていた一切がここに与えられたのではないか、とまで言いきる。しかし、同時に彼はこうも言う、「ところが、望んでいたものを手にした時、人は少しも幸せにはなっていないのだ」⁹⁸⁾と。ここに Enthusiasmus の悲劇がある。「彼の『夢』、『憧れていたもの』、『希望せるもの』は正しくフリー-デリケであり、彼女を措いて他に求むる愛の対象があるべしとも思われない気持は、ゲ-テの深く信じていたところである。しかしそのフリー-デリケの心は今悉く彼のものとなり、完全に彼女の愛を領有し得た時、彼の心はいつしか彼女から離れて、早くも他の或るものを求め始めるのである。」⁹⁹⁾「フリー-デリケは彼の魂の安息所であり、憧れの港であって、彼は常にそこに心のやすらいを求め、そこへ帰る事を欲していながら、そこに帰りついて魂の疲れが癒やされ、彼の心が満ちたらわされるや、力強い内心から盛り上って来る心の動きは、やがて又この愛の休息所から外洋の広さを求め、現在に静止する事ができなくなる。」¹⁰⁰⁾「ゲ-テがその意志に反してフリー-デリケとの永い愛の生活に入る事のできなかった事は、この天才の内面的動揺の中に宿命的な原因があったのである」¹⁰¹⁾(筆者傍点)と木村謹治氏は述べておられるが、この宿命的な原因とはツィンマーマンのいう Enthusiasmus にこそ帰せられるべきであり、ここにこそ、ゲ-テの悲劇の一切の原因が考えられる。Enthusiasmus はこの世のものと思えぬほどの恍惚、熱狂、感激を求め、それ故に、常にこの世の限定を嫌い、その限定を踏み越えていく。しかしゲ-テの矛盾はまさにヴェルター (Werther) がそうであったように¹⁰²⁾、その愛

が、感性豊かな人がつねにそうであるように、この世的なものに基盤をおく愛であったというところにあり、「彼は大地に根ぜす人間として瞬間の恵みを待望しているのである。」¹⁰³⁾ しかるにこの世の恵みを通して瞬間の美酒が飲み尽くされる時、この世のものはやがて生彩を失い、それと共にこの世的なるものへの愛は収縮の時を迎える。この Enthusiast の願望を名著『ゲ-テ』の著者 ホーエンシュタインほどに興味豊かに語ることは不可能であろう。ホーエンシュタインは言う、「感情こそが一切なのだ！彼が愛しつつ彼の『生を感じる』ことを許されているということはまさに幸福にほかならぬ。彼が彼の力の許す限り、感じつつみずからを拡大し伸張し、『人間の限界』を、換言すれば彼を狭く閉じてこめている個体の限界を破砕し追い散らしつつ自由を求めるということ、これがエロスの活動の目標であり、これこそエロスによって占有獲得であり、充足実現である。胸の感情、いわば陶然と無限なるものを占有し、世界を体験することに一切がある。……『それを幸福、心情、愛、神と名づけようか。俺はそれに名づくべき名を知らぬ。感情こそ一切だ、名前はひびき、霞、天の白熱をくもらすものにすぎぬ。』……」¹⁰⁴⁾ 「こうした『至福なる憧憬』の求むる最後の目標は肉体的な占有ではない、かかる憧憬にとっては恋人は闘にすぎぬ、通路にすぎぬ。彼女はゲ-テの魂のなかの形而上的な一契機、愛をつくりなすエロスの本質にほかならぬ。なぜなら愛は個体の『死』、『人格』の死にほかならず、また愛は狭き胸の宇宙への拡大、いわば世界の無限性への、もはやいかなる『遠さ』をも『難し』とせざる参入を意味するからだ。すなわち聖化である。感情の聖化、愛の死と死の愛、愛の至福裡の死、エロスの満足裡に死ぬ『生けるもの』の『焼死』、新しき生成を生み出すところの『死』、個体の障碍を押し破り……こころの嘆きを鎮め、『どこにも 向かわず、しかも 到るところに向って』憧憬を走らせ、今や『幸福裡に死ぬ』ところの無限の感情における自我の聖化……」¹⁰⁵⁾ (筆者傍点)、この

感情の聖化、自我の聖化こそが Enthusiast にとっては全てであって、あとは闘にすぎぬ、通路にすぎぬ、形而上的な一契機にすぎぬとホーエンシュタインは言う。恋人は無限へのエロス——(言い換えれば Enthusiasmus)——を呼びさます一契機にすぎない。その機能を果たし終えた恋人はうち捨てられる。そこに Enthusiast の残酷がある。故にゲ-テは Enthusiast としてのファウストを「人非人 (der Unmensch)」¹⁰⁶⁾ 「逃亡者 (der Flüchtling)」¹⁰⁷⁾ 「宿なし (der Unbehauste)」¹⁰⁸⁾ と呼ばざるをえない。定住する棲み家をもたぬ逃亡者、——Enthusiast はかくて世に容れられぬ人非人でもあるのだ。Enthusiast としてのゲ-テがフリー-デリケの「小さな世界」に定住する人間である筈はなく、ファウストも又、「グレートヒェンの『小さな清らかな部屋』 (das „Kleine reinliche Zimmer“ Gretchens)」¹⁰⁹⁾ に安住しうる人間である筈がない。

Enthusiasmus ——それは情熱の嵐であり、それは拡張 (Diastole) と収縮 (Systole) の反復する宇宙的な運動の一環である。それは必然である。その嵐の中にたまたまフリー-デリケがまきこまれたにすぎない。しかし結果として一人の少女を犠牲に供したと、これは罪である。しかし Enthusiast としてそれは必然である。しかし必然性 (Notwendigkeit) が罪であるというのはどういうことか、矛盾ではないのか。かくてツィンマーマンは言う、「この人間の条件はすべての生ける人間を、すなわち行為する人間を避け難く (unausweichlich) 罪へとひきずり込む。しかしまたすべての罪の中には同時にそのより深い無罪 (seine tiefere Unschuld) がある」¹¹⁰⁾ (筆者傍点) と。Enthusiasmus——それは情熱の嵐として人間を歓喜へと導くかにみえて、それは同時に避け難く人間を破滅へ、ひいては罪へとひきずり込む。しかし必然であるところに罪はあるのであろうか。ここに若きゲ-テの突極のジレンマがあった。ホーエンシュタインは言う、「エロスはしかしあくまでも質料の、『人格』の、牢獄に閉じこめられ

ている。空想裡の充足実現は、所詮、はかなき瞬間の眺めにすぎぬ。やがては牢獄の四壁に突き当たり、突き戻されて、有限の感情に帰らざるを得ないのである。有限なる形式への衰弱・収縮は、無限への伸長の心然的なる相関者であり、『愛』の疲憊のうちに現われる。それは道徳的な埒外に立つ不実、また限りある力の過張を放棄する常に必要な、宇宙的に必然的な断念、——いわば『拡張』に不可避免的に継起する『収縮』にほかならぬ¹¹¹⁾（筆者傍点）と。ホーエンシュタインはこのエロスの収縮を「道徳的な埒外に立つ不実」であるとしている。故にそれは悲劇であり、ゲ-テのかかる恋愛の悲劇をホーエンシュタインはまた『永遠の罪なき罪』の悲劇¹¹²⁾とも評している。或いはギュンター・ミュラーもこれを「罪とせられる体験、すなわち不正な行為なくして罪とせられる体験 (die Erfahrung des Schuldigwerdens; eines Schuldigwerdens ohne Unrechttuns)」¹¹³⁾であるとしている。

Enthusiasmus の閉鎖的な空間のうちにあっては必然的に破壊へと人を導くものがあるということをつリーデリケへのいわゆる罪なき罪を通してゲ-テは予感せざるをえなかった。それは悲劇の予感。人間存在が究極においてかかえている必然的な悲劇の予感。罪なくして罪とせられる人間にとっての不透明な悲劇の予感。しかしそれは予感にとどまる。エロスの幸せな饗宴、陶醉につつまれた何ヶ月かの牧歌、ゲ-テの一生を通じてこんなにも至福につつまれ、予感にみちた時は、このゼーゼンハイムでの何ヶ月かを措いて他にはない。しかし一人の少女の一生を決定づけた思い出としてゲ-テの心の奥深くに傷跡を残す。やがて『初稿ファウスト』の「グレートヒェン 悲劇」としてゲ-テ的なものが結晶化され、先鋭化されていく過程で、Enthusiasmus はその本来もっている真の形相をあらわにしていく。その糸口をつくったのがこのフリーデリケ体験に他ならない。そこにこそ若いゲ-テにとってのフリーデリケ体験の究極の意義があったというべきであろう。

勿論、ゲ-テのいわゆる「永遠に女性的なるもの (das Ewig-Weibliche)」¹¹⁴⁾との関連においても、ファウストの救済との関連においてもゲ-テにとってのフリーデリケの存在の意義についてはあらためて問われなければならないものがある。木村謹治氏の曰く、「捨てられたフリーデリケは、所謂幸福を得る事ができなかったが、その姿は浄化されて永くゲ-テの芸術創造の源泉において働く事をやめなかった」¹¹⁵⁾と。いわゆる贖罪の女グレートヒェンの姿に、捨てられたフリーデリケの姿が重なり合うところがあることは明白である。そこにフリーデリケという存在のゲ-テにとっての新たな意義が認められるところであろうが、それについて問うことは別の機会に譲り、本論考においては、Enthusiast としての若きゲ-テにとってのフリーデリケ体験の意義を問うのにとどめておきたい。

注

- 1) J. W. Goethe, Gedichte und Epen I, in Hamburger Ausg., Bd. I. S. 78.
- 2) J. W. Goethe, Dichtung und Wahrheit, in Hamburger Ausg., Bd. IX, S. 500.
- 3) Emil Staiger, Goethe 1749-1786, Arthemis Verlag. Zürich und München, 1978, S. 53.
- 4) 木村謹治著、「若きゲ-テ」研究、弘文堂書房、昭和15年、2頁。
- 5) Vgl. J. W. Goethe, Dichtung und Wahrheit, S. 251.
- 6) J. W. Goethe, Dichtung und Wahrheit, S. 251, 252.
- 7) J. W. Goethe, Faust, in Hamburger Ausg., Bd. III, 1976, S. 62.
- 8) この当時のキリスト教の状況をゲ-テは『詩と真実』の中で、「キリスト教は歴史的に実証された啓示宗教と、人倫に基礎づけられながら、同時に道徳を基礎づけるといった理神論の間に立って動揺していた」(J. W. Goethe, Dichtung und Wahrheit, S. 334)と書いているが、キリスト教も又、18世紀当時の啓蒙主義の精神にさらされて、歴史的に批判検証すると同時に、純粹に自然理性の範疇の中で理解しようとする動きの中で、その啓示宗教 (positive Religion) としての性格が解体の危機に瀕しつつあった。
- 9) Kurt Hildebrandt, Goethe, seine Weltweis-

- heit im Gesamtwerk, Verlag Philipp Reclam Jun., Leipzig, 1942, S. 19.
- 10) J. W. Goethe, Dichtung und Wahrheit, S. 269.
 - 11) ibid. S. 252.
 - 12) Günther Müller, Kleine Goethebiographie, Athenäum Verlag, Frankfurt am Main · Bonn, 1963, S. 18.
 - 13) K. Hildebrandt, Goethe, seine Weltweisheit im Gesamtwerk, S. 33.
 - 14) J. W. Goethe, Dichtung und Wahrheit, S. 287.
 - 15) ibid. S. 257.
 - 16) ibid. S. 298.
 - 17) Vgl. G. Müller, Kleine Goethebiographie, S. 18.
 - 18) J. W. Goethe, Dichtung und Wahrheit, S. 283, 284.
 - 19) Vgl. ibid. S. 279.
 - 20) ibid. S. 256.
 - 21) ibid. S. 256.
 - 22) ibid. S. 256.
 - 23) ibid. S. 256, 257.
 - 24) ibid. S. 257.
 - 25) ibid. S. 330.
 - 26) ibid. S. 284.
 - 27) ibid. S. 284.
 - 28) ibid. S. 269.
 - 29) G. Müller, Kleine Goethebiographie, S. 19, 20.
 - 30) J. W. Goethe, Dichtung und Wahrheit, S. 299, 300.
 - 31) ibid. S. 298.
 - 32) ibid. S. 299.
 - 33) ibid. S. 305.
 - 34) ibid. S. 502, 503.
 - 35) K. Hildebrandt, Goethe, seine Weltweisheit im Gesamtwerk, S. 38.
 - 36) J. W. Goethe, Dichtung und Wahrheit, S. 413.
 - 37) ibid. S. 413.
 - 38) ibid. S. 413.
 - 39) ibid. S. 514.
 - 40) K. Hildebrandt, Goethe, seine Weltweisheit im Gesamtwerk, S. 49.
 - 41) ibid. S. 49.
 - 42) ibid. S. 48.
 - 43) ibid. S. 49.
 - 44) Vgl. ibid. S. 50.
 - 45) ibid. S. 51.
 - 46) ibid. S. 51.
 - 47) ibid. S. 51.
 - 48) ibid. S. 51.
 - 49) ibid. S. 51.
 - 50) J. W. Goethe, Dichtung und Wahrheit, S. 414.
 - 51) ibid. S. 355.
 - 52) ibid. S. 356.
 - 53) ibid. S. 356, 357.
 - 54) ibid. S. 357.
 - 55) ibid. S. 357.
 - 56) E. Staiger, Goethe 1749-1786, S. 52.
 - 57) ibid. S. 47, 48.
 - 58) J. W. Goethe, Dichtung und Wahrheit, S. 433.
 - 59) ホーエンシュタイン著, 斎藤栄治訳, ゲーテ —ピラミッド—, 桜井書店, 昭和21年, 49頁。
 - 60) 木村謹治著, 「若きゲ-テ」研究, 123頁。
 - 61) J. W. Goethe, Dichtung und Wahrheit, S. 433.
 - 62) ibid. S. 456.
 - 63) ibid. S. 456.
 - 64) ホーエンシュタイン著, ゲーテ —ピラミッド—, 46頁。
 - 65) J. W. Goethe, Gedichte und Epen I, S. 31.
 - 66) E. Staiger, Goethe 1749-1786, S. 55.
 - 67) ibid. S. 62.
 - 68) Vgl. ibid. S. 52.
 - 69) J. W. Goethe, Dichtung und Wahrheit, S. 397.
 - 70) 木村謹治著, 「若きゲ-テ」研究, 126頁。
 - 71) J. W. Goethe, Dichtung und Wahrheit, S. 460.
 - 72) ibid. S. 460, 461.
 - 73) ibid. S. 468.
 - 74) ibid. S. 469.
 - 75) ibid. S. 469.
 - 76) ibid. S. 471.
 - 77) Goethe, Leben und Welt in Briefen, zusammengestellt von Friedhelm Kemp, Carl Honser Verlag, München Wien, 1978, S. 50.
 - 78) J. W. Goethe, Dichtung und Wahrheit, S. 498.
 - 79) ibid. S. 498.
 - 80) ibid. S. 499.
 - 81) ibid. S. 498.
 - 82) ibid. S. 500.
 - 83) ibid. S. 500.
 - 84) ibid. S. 500.
 - 85) ibid. S. 520.

- 86) *ibid.* S. 498.
- 87) Johann Peter Eckermann, *Gespräche mit Goethe*, F. A. Brockhaus · Wiesbaden, 1975, S. 412.
- 88) J. W. Goethe, *Dichtung und Wahrheit*, S. 521, 522.
- 89) *ibid.* S. 436.
- 90) *ibid.* S. 442.
- 91) Duden, *Das große Wörterbuch der deutschen Sprache* 2. によれば, *Enthusiasmus* [griech. *enthousiasmos*, zu : *entheos*=gott-begeistert] とあるように, *Enthusiasmus* の原義は, 神的に熱狂させられた状態の意。
- 92) Rolf Christian Zimmermann, *Das Weltbild des jungen Goethe*, zweiter Band, Wilhelm Fink Verlag, München, 1979, S. 237.
- 93) *ibid.* S. 238.
- 94) *ibid.* S. 238.
- 95) *ibid.* S. 239.
- 96) *ibid.* S. 241.
- 97) *ibid.* S. 269.
- 98) Goethe, *Leben und Werk in Biefen*, S. 50.
- 99) 木村謹治著, 「若きゲ-テ」研究, 129頁。
- 100) 同書, 130頁。
- 101) 同書, 130頁。
- 102) ヴェルター的な感情の横溢は, この世のものに根拠をおきながら, そこにとどまりえないその際限のなさにある。*Enthusiast* としてファウストとヴェルターは一卵性双生児である。〔参照, 拙稿『ヴェルターにみる若きゲ-テの悲劇のモチーフ』(『阪南論集』第19巻, 第2号)〕
- 103) E. Staiger, *Goethe 1749-1786*, S. 169.
- 104) ホーエンシュタイン著, *ゲ-テ——ピラミッド——*, 89頁。
- 105) 同書, 90頁。
- 106) J. W. Goethe, *Faust*, S. 107.
- 107) *ibid.* S. 107.
- 108) *ibid.* S. 107.
- 109) R. C. Zimmermann, *Das Weltbild des jungen Goethe*, zweiter Band, S. 270.
- 110) *ibid.* S. 270.
- 111) ホーエンシュタイン著, *ゲ-テ——ピラミッド——*, 21頁。
- 112) 同書, 59頁。
- 113) G. Müller, *Kleine Goethebiographie*, S. 51.
- 114) J. W. Goethe, *Faust*, S. 364.
- 115) 木村謹治著, 「若きゲ-テ」研究, 133頁。

(1987年4月13日受理)